教育はリレーと同じ

現在、北中には二名の教育実習生が来ています。一人は旧瑞陵中学校の卒業生、もう一人は旧日吉中学校の卒業生です。自分たちが学んだ校舎ではないことは残念でしょうが、将来目指す職業について現場で学ぶことができ、二人とも心地よい緊張を感じながら取り組んでいることでしょう。

二人とも固い決心をもって実習に臨んでいます。養護教諭という将来の方向にブレはないようです。将来の学校を任せるには、「教師になりたい！」と強く思っている人物が最適です。二人には、ぜひとも頑張って教職に就き、児童生徒を大人へと導いてもらいたいものです。

しかし、教師の現状には厳しいものがあります。全国的に、「教師になりたい」と思う人材が非常に少ないのです。原因はいろいろあるでしょう。勤務時間の問題、労働環境労働条件の問題など、さまざまなことが指摘されている中で、教育という日本の将来を担う職のイメージが徐々に悪くなっているように思います。

確かに、時代と共に教育の方向や学校のあり方は変わっていくべきでしょうが、いつの時代も変わってはいけない部分はあります。私もそれを大切にして、三十数年教師をやってきました。楽しくやってきたときもあれば、必死にやってきたときもあります。悲しい思いをしたこともたくさんありました。「教師を辞めたい」と思ったことも……。

どんな時にも、私のそばにあったのが生徒の存在です。つらいことがあっても、翌日に生徒たちが登校してくると思ったら、自然と学校に足が向きました。辞めたいと思ったときにも、ちらつくのは生徒たちの顔。これが教師の性（さが）なのですね。なかなか抜け出ることはできませんでした。

給料日を指折り数えたことは、私にはありません。毎日毎日がむしゃらにやっていたら、知らぬ間に給料日が来ていました。生徒のために時間を忘れてやってきたこと、生徒の笑顔や成長を何よりの報酬として頑張れたことには、一度きりのライフワークとして満足しています。

教育はリレーと同じです。次の時代の人間を育てるために、今の時代の私たちが頑張っています。教育実習生は教師の卵。その人たちに気もちよくバトンを受け渡し、次の生徒を育てるために頑張ってもらいたいと思います。

生徒のみなさんの中にも、次の次のバトンを受け継ぐ人物（教師になる人物）が一人でもいいから出てほしいなあ。教師になりたいと思っている人はいませんか。楽とは言いませんが、やりがいはありますよ！

（九月二十八日　記）